

平成28年度能代市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 平成29年2月15日（水）午後1時30分～2時30分
- 2 場 所 能代市二ツ井町庁舎 大会議室
- 3 出席者 能代市長 齊藤 滋 宣
能代市教育委員会
委員長 木村 高 寛
委 員 西村 省 一
委 員 浜野 恵美子
委 員 中嶋 佐千子
教育長 須藤 幸 紀
- 4 案 件 能代市の道德教育を考えるにあたって

【開会】（教育部長）

ただいまから、平成28年度能代市総合教育会議を開会いたします。はじめに、齊藤滋宣能代市長がごあいさつを申し上げます。

【市長あいさつ】（市長）

本日は大変お忙しいところ、またお足元の悪い中にもかかわらず、能代市総合教育会議にご出席いただきまして心から厚くお礼申し上げます。

教育委員の皆様方には常日頃から、能代市の教育行政に対し多大なるご理解とご協力、時には大変厳しいご意見を頂き、本当にありがたく思っております。

能代の次代を担う子どもたちが心豊かに、大きな夢を育ててほしいという思いは共通だと思いますので、どうかこれからも皆様方のお力をお貸しくくださいますよう心からお願い申し上げます。すでにご承知のとおりであります。昨年、この能代市総合教育会議を設立させていただきました。その中で、皆様方からいろいろなご意見をいただき、能代市の教育等の振興に関する施策の大綱をまとめてさせていただきました。今、市議会3月定例会に向けて、来年度予算の精査をしているところでありますが、この大綱に沿って能代の教育行政が進むことができるように最大限の努力をしていきたいと思っております。

今日は、教育長からこの後15分ほど話をしてほしいと言われておりますので、私の話はその時にさせていただきます。今日は忌憚のないご意見を交換させていただき、少しでも能代の教育が前向きに、そして1歩でも2歩でも前に進むように、実りある会議になることを心からお願い申し上げます。会議冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしく申し上げます。

（教育部長）

ありがとうございます。続きまして、市教育委員会を代表しまして木村教育委員長からごあいさつをお願いいたします。

(木村委員長)

市長には、いろいろとご指導賜りましてありがとうございます。

市長のあいさつにもあったとおり、本市の教育目標となる大綱を「学びあう、感謝と思いやりにあふれる“わ”のまち能代」とし、すべての市民が教育に参加することを目指し、また、市民に教育について関心をもっていただきながら、みんなで能代市の子どもを育てていく、そういう思いが込められた教育指針を示していただきました。保護者の視点で「通わせたい学校があるからこの街に住みたい」と選ばれるような“教育都市能代”にと、願いを込めて作成されたことだと思います。言うまでもなく、能代市の学力は、小・中ともに全国トップレベルとなっており子どもたちが大変健闘しております。

豊島区・能代市の教育懇談会に参加させていただきました。その中で、能代市の先生方が授業づくりについて、自身または学校の実践を発表する時間があり参観させていただきました。能代市の教育の質の高さを改めて実感した思いでした。

今日は能代市の道徳教育を考えるということで、子どもたちが育んできた知恵、知識を慈しみの心につなげていければと思っております。共に生きるということを学ぶ場、それが学校教育だということを、学校と家庭と地域の視点で、能代の“わ”で、子どもの課題や目指す方向を共有できればと思っております。よろしくお教えいただければと思っております。

【案 件】

能代市の道徳教育を考えるにあたって

(教育部長)

それでは、案件に入ります。

これ以降の会議の運営については、市長が議長として進行することになりますのでよろしくお願いたします。

(市長)

それでは、進めさせていただきます。

さっそくですが、本日の案件「能代市の道徳教育を考えるにあたって」であります。この案件を提出するに至った経緯について教育長より説明をお願いしたいと思います。

(教育長)

市長には、お忙しい中、要請に応じていただき本当にありがとうございます。

私は、教育長として日頃から能代市の特色ある教育の実施と、義務教育段階の児童・生徒の学力の保障ということを第一に考えてまいりました。

特色ある教育については、あきた白神農業協同組合の袴田さんの影響が大きく、豊島区との教育連携事業が始まり、その実施と充実が成果としてあります。児童・生徒は以前より表現力が身につくにつれ、教師は他から見られることで授業力が磨かれてきております。また、自身の実践をまとめ、振り返ることで実践の理論化を行い、それが自信に結び付いているように感じております。義務教育段階の学力保障については、さきほど委員長からもありましたが、全国学力学習状況調査及び県の学習状況調査は、概ね満足する結果で安定しております。

ただ、学習環境を支える生徒指導には多少課題があると思っております。例えば、不登校やいじめの存在です。原因が家庭にあることも多いのですが、主体的に学校としてどう対応すべきかが、能代市の大きな課題になっているのではないかと思います。その点で、私は福井県の教育が参考になるのではと思ひ、興味をもち調べてみました。

福井県は教師による一斉指導が多いのですが、中学生になると急激に学習成績が伸びるという

特色があります。秋田県と違う点として、宿題の量が非常に多いことがあります。宿題をやらなければ部活は禁止で、秋田県で同じことをすると懲戒処分でも受けそうな気がします。福井県の保護者は納得しています。それから、話をせずに雑巾だけで校舎をきれいに『無言清掃』が全県的に実施されています。また、永平寺中学校のことですが、登校、下校時に校門で一礼して出入りするなど、生徒指導は結構厳しくされております。

中学校の5教科については先生方は縦持ちで、1～3年のすべての学年を一人の人が必ずもちます。秋田県は横持ちで、担任が2年生であれば2年生の教科だけをもっています。これも、特色の1つであると思います。また、教員のほとんどが小・中の免許をもっていることから小と中の両方を経験しており、行ったり来たりしながら教科の系統性を理解しているのではないかと思います。

さらに、祖父母が非常に孫の教育に熱心で、両親の代わりに宿題をきちんとやっているかどうか見取っています。不登校やいじめに関しては大きな問題にはなりません。無いという訳ではありませんが、少ないということでした。私から見ると、修身的な風土が地域に支持され、小学生の頃から、特に有名な会津若松の「ならぬものはならぬのです」というようなものが、身に付いていることが裏にあるのではないかと思います。

以上のことから、能代の教育の「根っこ」をしっかりとさせることが、生徒指導の安定と学校生活を充実したものにするのではないかと思います。何を根っことするか。「道徳の強化」が大切ではないかと思います。次期学習指導要領で「特別の教科 道徳」となりますが、児童・生徒、大人も含めて、最低限、身に付けさせたい徳目をしっかりとさせることで、体幹のしっかりした人間が育成されるのではないかと思います。

さきほど委員長からもありましたが、“わ”のまち能代を掲げる市長の道徳に対する考えや思いを知り、教育委員の皆様のご意見も踏まえて学校教育に生かしたいと思い、忙しいところ本当に申し訳ないですが、市長にお願いしました。今日はよろしくお願ひします。

(市長)

ありがとうございます。今、教育長からお話がありましたように、私が考える道徳をお話させていただき、また、委員長をはじめ委員の皆様からもご意見を頂戴して、今後の道徳教育の中に少しでも生かせるものがあればとの思いでお話をさせていただきます。

今回、この道徳教育についてお話をさせていただくというのは、私にとって、今まで考えてきたことを今一度見直す良い機会であったと思っています。

私はいろいろな所であいさつをする時に、人から聞いて心に残っている話や自分が読んだ本、体験したことを話すことで、一つでも二つでもそれを聞いた人たちの役に立ちたいと、ずっと思ってきました。それは、自分にしてみれば、道徳というよりも、自分が今、まちづくりの中で進めている心の豊かさにつながっていくのではないかと考えていたからです。おそらく教育長は、それが道徳的なところにつながるのではと考えたのでしょう。そのほかにも、自分が読んで教育的に活用できるのではないかと、思うものをコピーして、教育長に何度かお渡ししたことから、今日の機会になったのだと思います。

最初から結論めいたことを言って申し訳ないのですが、これまで自分が考えていた道徳と今回このお話をするとあたり行き着いた結論は、ちょっと違う方向を向いていて、自分の今までの道徳観が変わったと思っています。

我々が「道徳」をしなくなった理由の一つは「修身」にあります。戦前、行われていた修身教育が第二次世界大戦を契機に禁止されました。おそらくみなさんの認識も「禁止された」だと思います。GHQは、1945年12月「修身・日本歴史及び地理停止に関する件」という指令を出しています。一つはさきほど言った「修身」、二つ目は、これまで日本人が描いてきた歴史をそのまま学んでいくと、また軍国主義に行きつくのではないかとということで「歴史」です。三つ

目が、日本の国の領土がどこまでかと考えた時に、戦争で奪った領土は一体どうなるのかという議論が出てくるであろうということで「地理」です。「禁止」ではなく「停止」です。なぜ停止かということ、日本の修身には一部にいわゆる軍国主義だとか超国家主義的な文言があるが、そこを是正すれば、もう一度修身というのはあってもいいのではないかという考え方からでした。

ところが、戦後の教育現場の中では、GHQの言ったことはすべて正しいとされ、また、修身を「禁止」という言葉を使うことでGHQの意向であるという形にもっていったのです。マッカーサーがいなくなり徐々に占領政策も変わり、日本国内ではどちらかということ「戦争前の教育、考え方は全部だめ、戦後の民主主義が全て」という考え方になっていき、結果、禁止ということになったのです。私もそうですが、日本人はずっとそう思っていました。

1958年に道徳教育が復活しますが、その頃の道徳はというと、土曜日の3時限目か4時限目に席替えやクラス委員の選任をしたり、また、運動会が近ければ運動会の練習をするなどといった時間に充てられていました。何故こんなことになったかということ、1940年から50年代というのは日本教職員組合、つまり日教組の全盛時代で、組合員数50万人の組合でした。日教組対文部科学省という構図があったことから、道徳は、昔の修身と一緒だから教えなくてもいいということになるわけです。ですから、我々の子ども時代の道徳は、運動会の練習や席替え、時には外に出てドッジボールや野球をやるような時間になって、本当の意味での道徳が評価されていなかった時代だと思います。

それが、どうして今「道徳の教科化」が出てきたのか。今まで反対してきた勢力である日教組の力が弱くなってきたこともあるのですが、2015年3月に文部科学省が道徳の教科化を決めるまで今回は全く反対していません。それどころか、読売新聞の世論調査をみると父兄の84%は賛成です。どうしてこういうことが起こってきたのか、考えるといろいろな理由があります。

一つはいじめの問題だと思います。道徳教育をしなくなり、いじめがいろいろなところで表れてきています。いじめの延長線で、大人のセクハラ、パワハラがあります。社会的に見ても、これまで全く考えられなかった、子どもが親を殺したり、親が自分の腹を痛めた子を殺したりという社会世相の変化に、国民が「本当にこれで良いのか。このままで本当に日本は大丈夫なのか。」と、不安をもち始めたことがあると思います。

もう一つは、東京にはいろいろなものがあり、確かに能代にあるものは少ないかもしれませんが、地方には地方の良さがあります。その1番が「絆」、「人と人とのつながり」であるとよく言われます。しかし、その人間関係が崩れてきて、孤独死、さらには無縁死そういった人たちが増えてきました。いなかでも1週間、2週間、隣の人が亡くなっても分からず、後で見つかるということが起こるようになっていきます。内閣府の調査結果では、2040年に孤独死、無縁死が20万人になると言われています。年間100万人が死ぬと予測されていることから、5人に1人が孤独死、無縁死ということになります。行政が火葬課を作ってお骨にして、預けられるところに預けるという対応を求められるのではないかと心配しています。それぐらい人間関係が崩れています。もう一度、道徳を考えなければいけないとなった背景には、こういう現状があります。

それから、先ほどの教育長の話につながりますが、ある意味、道徳は子どもたちの学力のレベルをあげるのに役立っているという思いもあります。それは何かというと、さきほども話したいじめです。学校の中でいじめがあると、子ども同士の間人間関係が壊れているから当然まとまりも調和もありません。子どもたちが真剣に授業に集中できる環境にはないと思います。人に優しくできるとか、秋田県の学力がなぜ日本一かということ早寝早起きであることが大きいと思いますが、そういう環境が少しずつ崩れてきています。特に、都会ではそうですから、やはり道徳を身に付けさせなければいけないのではないかと考え、道徳教科化が始まったものと思います。

参考資料の中にも出ていましたが、今回の道徳教科化で良いと思ったのが、Q6にある「考え議論する道徳」です。今まではどちらかということ国語でもそうですが、そこに登場する人物がどういうことを思ってこういう行動しているのか、教科書を読み取る＝読み取り教育だったもの

が、自分の頭で考え、考えたことを子どもたちに議論させ、そして、それを進化させていくという教育になります。とても素晴らしいと思います。

小学校の英語教育がいよいよ始まりますが、先日、教育長が「小学校の先生が英語を教える指導を受けていないことから、そういう先生が教育することができるのか大変心配だ」と話していました。道徳でも同じことが言えると思います。

小学校で教える道徳、中学校で教える道徳ではレベルがかなり違います。「道徳」とは一体何か。道徳と倫理はどうちがうのかと思い辞書を引いてみました。道徳とは、社会生活を営む上で一人ひとりが守るべき行為の基準とあり、倫理とは道徳のことで、倫とは仲間であり、仲間の理、つまり仲間と共有する規則を守るということであります。

小中の道徳のレベルが違ってきた時に、中学校の先生は道徳を教えきれるのか。例えば、遺伝子組み換えとか、脳死、クローンなどと道徳との絡みを教えるとなった時に、そういう専門性をもった先生がいるのか。道徳を教える先生が、大学でそういったものを学び、教えるとなると、先ほどの英語教育と同じで、「教えられる人が教えたらいいいのでは」と、習っていない先生が我関せずとなるのではないのか。専門的な人があることは大変重要ですが、教育者間における道徳観の層が生じないかと心配になります。

いずれにしても、学校教育の中で道徳を教えるのはとても素晴らしいことだし、我々がいう感謝と思いやりにあふれる“わ”のまちな能代は、当然それが基本になっていると思っています。

最初に戻りますが、道徳とは何かと考えた時に、私は、ずっと、人を思いやることであり、人を思いやることは感謝することから出てくると思っていますが、さっき言ったように、辞書で引くと道徳とは行為の基準です。行為の基準が感謝や思いやりであってよいのか。結論から言うと、「自分自身がいかに大切な存在であるかを知ること」が道徳ではないかと思うようになりました。自分自身がいかにかげがない存在かを知ることが自分自身を知る。当然、自分自身がそういう存在であることを知れば、自分自身と同じ生命を持っている者も同じくかけがない存在であることがわかります。そうすれば人に優しくしたり、感謝の気持ちをもったり、自分自身がしてほしくないことは相手にはしないという思いが出てきます。

早寝早起きも、感謝と思いやりでは基準にはなりません。かけがえのない存在、自分には天命というか生まれた意味があるはずで、その生まれた意味を実現するために自分自身を磨かなければなりません。自分自身を磨くということは、生活の規律をしっかりと守り、自分が努力できることを一生懸命努力していく。また、目標を立てたら忍耐強く辛抱しながらそれを成し遂げる。つまり、自分自身の練磨＝自分磨きであろうと思います。そういったことを含めて道徳というのではないかと思うようになりました。

自分自身が存在していることは偶然です。必然であるかもしれませんが、どこかで歯車が一つ狂っていたら、もしかしたらということも考えられます。筑波大学のDNA専門家である村上和雄先生が「人間と猿の違いは0.03%である」と言っています。昔の人は、毛が3本足りないと言っていました。その程度の違いの中で、我々は人間として生まれています。こうして生まれてきたことに感謝し、自分たちがなぜ人間として生まれてきたのかということから入っていくのだろうと思います。

なぜこんなことを考えたのかというと、中学校の生徒が自殺する時に「なんで、人間は死んではいけないのか。自分の命だもん。死のうと生きようと勝手じゃないか。」、また、売春による性非行に走った子どもが「自分の体だもの、なんに使おうと良いじゃないか。あなたたちに関係のない話でしょう。」と言った時に、先生方が答えられなかったことがあったそうです。でも、その時に、自分自身がかけがない存在であることを知ることが、自分たちにとって本当の基準だとしたら、自分を卑しめること、自分自身が与えられた命を自分でなくしてしまうことは、自分が生まれたことに対する事実に対して反するのではないかといったところに求めていくと、きっと説明がつくのではないかと思ったのです。私は、道徳の原点はそこにあり、そして、同じ

命をもつ者を大切にしていくという教育が道徳教育なのかなと思いました。

子どもたちに、自信をもってもらいたい。自分自身のかげがえのない人生を大事にしながらしっかりと生きていただきたい。それが、先ほどから課題となっているところをクリアする大きな要因の一つになるのではないかと思った次第です。

今日はこういう機会をいただき改めて感謝申し上げ、話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(市長)

取り留めのない話になりましたが、考えていることを話させていただきました。言い過ぎた点もあるかもしれませんが、お許しいただき、わたしの意見、教育長の意見を含めまして、皆さんから、ご意見やお話をお伺いしたいと思いますので、委員長から西村さん、浜野さん、中嶋さんとお願ひします。

(委員長)

道徳は必要、人間として生きていくために必要なのでしょうか。では、道徳とはどういう位置付けなのでしょう。無着成恭さんにお会いした時に、「形があるから型破りというんだよ。形を身に付けていなかったらただの型無しだからね。」と話されていました。型というのは、私どもの道徳にあたってくるのではないのでしょうか。型は生きていく上で、人間が共に生活していく上で必要なものです。しかし、その型は、価値観の多様化や個人主義によって、何が正しくて何が正しくないのかが一人ひとり見えなくなってきました。

さきほど、参考資料のQ6①について市長も話されていましたが、これまでの道徳は読み物教材が中心でしたが、これからの道徳は、問題解決的な学習、子どもが考え議論する学習に変わっていくという位置付けなのではないかと思ひます。

前の道徳心と新しい道徳心はどこが違ってくるのでしょうか。人間というのはみな弱いものですから、それぞれ自分を戒める努力が必要になります。それが道徳、それを守ろうという心が道徳心です。新しい道徳とは、人の喜びや悲しみを、自分の喜び、悲しみと受け止められる人やそういう心を育てていくことであると思ひます。他と自分の命がみな同じ命なのだということ、あなたの命が傷つくことは私の命が傷つくこと、それが、人だけでなく自然の全てのものにかかることであり、水を汚すことは自分の心を汚すことにつながっていく、そう考える道徳になっていくのだらうと思ひます。今までもそうであったと思ひますが。

先人の心をいただいていくと、例えば宮沢賢治の「雨にも負けず」の中に「日照りのときは涙を流し、寒さの夏はオロオロ歩き、みんなにでくのぼうとよばれ、ほめられもせず、苦にもされず、そういうものにわたしはなりたい。」とあります。ここで言っているのは、本当の幸せというのは、モノ、お金、経済のものさしでは計れないということではないのでしょうか。世界一貧しい大統領として知られたウルグアイの大統領ですが、彼は貧乏とは少ししか持っていないのではなく、無限に欲があり、いくらあっても足りないことを貧乏という「心の豊かさのものさし」について話しています。今までは、経済のものさしで幸せ感が走ってきた時代だと思ひますが、そうではなく、心のものさしで子どもたちを育てていく時代、そういうものを新しい道徳のものさしと捉えて進むべきだらうと思ひます。

ただ、これは子どもだけでなく、先生、父兄ともに同じものさしをもっていくというのは、大変なことだらうという感想をもっています。

(市長)

ありがとうございます。西村委員お願ひします。

(西村委員)

道徳についてあまり深く考えていませんでしたが、いろいろ調べてみると、大震災の後、略奪等が起こらなかったことなど、日本人の道徳心は海外から高い評価を受けていることがわかりました。そう考えると、今回の道徳の教科化はいじめの問題が根底にあるような気がします。

私が生まれてから、道徳は教育化されていなくてもいろいろな場面で出てきていたと感じています。例えば、父母や祖父母から花咲かじいさんとか舌切りすずめなどの昔話を通して、悪いことをしてはダメだと諭されたり、お寺に行けば閻魔様や地獄絵があって「うそをつくと舌をぬかれる」と聞かされたり、そういうことが道徳であったと思います。また、学校の教科書の中にも道徳的なことが入っていたと思います。昔、社会の番組であったと思いますが、「良太の村」というテレビ番組を見る授業がありました。水害があり、大人から子どもまでみんなで一生懸命助け合う場面があったのを鮮明に覚えています。

しっかりあいさつをするなどの基本的なルールやマナーを守ることは、子どもたちの身に付いていると思います。私たちが子どもの頃は、こうしなければならない、ああしなければならないと答えがはっきりしていて、すべて上からの指示みたいなものがあり、単純にそれを受け入れてきた気がします。それではいけないのではないかと思いました。幸いにも、今、学校の授業をみていると、問題解決型というか自分たちで考えて答えを導き出すという授業に変わってきています。みんなで話し合い協力し、みんながそうだなと納得のいく形での道徳の授業であってほしいと思います。

余談ですが、昨日の読売新聞で日本人の国民性全国調査（20歳以上）の記事が載っていました。人は他人の役に立とうとしていると思うか、自分のことだけに気を配っているかという質問調査であったのですが、40年前の1978年は人の役に立とうとしているが19%、自分だけに気を配っているが74%であるのに対し、東日本大震災の後の2013年調査では、人は他人の役に立とうとしている人が45%、自分だけに気を配っている人が42%で逆転しているそうです。これまでは思いやりのある行動をしたいと思っても、良い人ぶっているとか後ろ指を指されるのではと心配し、行動しにくい面があったようですが、震災後は、人助けや思いやりを隠さなくても良い雰囲気が社会全体に形作られてきたと感じています。

大人が変われば子どもが変わる。私自身も変わらなければならないと思っています。ぜひそうありたいと思っています。

(市長)

良い話ですね。ありがとうございます。浜野委員お願いします。

(浜野委員)

道徳ということで、自分はどんな人間か、親としてどうか考えさせられました。自分はこうありたいと今感じていることを話したいと思います。

文科省のホームページに、児童生徒が命を大切にする心や他人を思いやる心、善悪の判断等規範意識の道徳性を身に付けることがとても重要だと書いてありました。それでは、規範意識の道徳性はどうしたら身に付けられるのかと考えてみましたが、私は、幼少期からの家庭での教えが重要になってくると思います。

家庭内のことや友達との遊び、絵本やテレビ、スーパーでの買い物の場面など、いろいろな場面で子どもに教える機会はたくさんあります。家庭で教えて社会へ送り出し、幼稚園、小学校、中学校といろいろな体験を積んで心が成長していると思います。学校では、実際にあったことを事例に挙げながら、みんなで議論していくということも大切になってくると思います。

生命を大切にする心、他人を思いやる心を身に付けるにはどうしたらよいか。先日読んだ本の中にこんな言葉がありました。「お互いに、縁あってこの世に生まれてきた。そして、縁あって

いろいろな人とつながりをもっている。人と人とのつながりというものは、とかく人間の個人的な意志でできたと思いやすいもので、だからまたこのつながりは、自分一人の考えで、いつでも断てるかのように無造作に考えやすい。だが本当はそうでない。人と人とのつながりには、実は人間のいわゆる個人的な意志や希望を超えた、1つの深い縁の力が働いている。お互いに、この世における人と人とのつながりを、もう少し大事にしてみたい。もう少しありがたく考えたい。不平や不満で心を暗くする前に、縁のあったことを謙虚に喜びあい、その喜びの心で、誠意と熱意をもって、お互いのつながりをさらに強めてゆきたい」。この言葉が印象に残っていて、市長から人と人とのつながりが崩れてきているというお話がありましたが、私も、今一度、縁あってという気持ちをもちながら生活することで、自然に優しい心、思いやりの心が備わってくるのではないかと思いました。そして、周りの人を大切にする、人の役に立つ人間になりたいという気持ちが、子どもたちの中に生まれてくることを望んでいます。そして、これからの社会が明るい社会になってほしいと思います。

(市長)

今、お話を聞いて思い出しましたが、「人の出会いというのはただの一瞬も早く、ただの一瞬も遅く、そういうことはなく出会うべくして出会う。」ということがあります。全くそのとおりです。中嶋委員お願いします。

(中嶋委員)

道徳を考えたとき、教育大綱にある基本理念の「感謝と思いやり」それと「あいさつ」を思い出しました。

幼い頃、両親に何を言われたか記憶をたどってみました。単純なことですが、父からは「兄弟は仲良く過ごさない」、母からは「自分の行動で相手がどう思うか考えて行動しなさい」、そして、結婚してからは義理の母から「人を許すという気持ちが大切だ」と学びました。

私たちの時代は、道徳は家庭で学ぶという割合が高く、幼い頃の家庭での学びは大人になってからのコミュニケーションに大変活かされています。コミュニケーションのきっかけとして、あいさつは、お金のかからないコミュニケーションだと思っています。

家庭での教育が基本となりますが、教育長がおっしゃる「根」の充実、道徳の強化、そして市長がおっしゃる「自分自身がいかに大切か」を知ること、これらは、生徒指導の部分で大きな変化が得られるのではないかと考えます。

また、さきほど日本人の国民性について西村委員もおっしゃっていますが、どんどん教育が変化することによって、自分のためでなく、人のためと考える方の割合が増えていくのではと思います。

(市長)

ありがとうございます。教育長、お願いします。

(教育長)

みなさんからありましたように、私も、日本人は外国人に比べて道徳心が強いと思ってきました。先日、テレビで、外国人が財布を落としたら、通りかかった日本人はどうするか調査したところ、気がついた全ての日本人が拾ってあげたという内容の放送を見ました。何かしら民族として最低限のことがあるのだらうと思いました。しかし、学校教育の中ではいじめがなくなり、学校に行けない子が出ています。様々な力を注いでいますがなくなりません。人と人とのつながりが薄いから、コミュニケーションがとれないところに要因があるのではないかと感じてきました。

市役所に入り、市長がいつも「あいさつ、返事、笑顔」、これを繰り返し、繰り返し職員に求

めているのを目にしています。中嶋委員が「あいさつはお金のかからないコミュニケーション」とおっしゃっていましたが、なるほどと思いました。単純なことを長く習慣化させていくことが、一つの道徳心に結びついていくのかもしれませんが、ただ、子どもたちは一つのことに流されやすいので、自分というものをもう少し見つめることが必要であり、そういう意味で市長のおっしゃった「自分の命を大切にする」ということを徹底していくべきなのかなと感じました。

しかし、子どもたちは心を豊かにする前に貧困の問題もあります。難しいこともありますが、自分一人では生きていけないこと、自分を大切にすることは他を大切にするのだと様々な経験を通して知っていくこと、そうした経験を積み重ねていくことが子どもたちの成長につながるのではないかと思います。また、そのことが自分自身にゆとりをもたせて、学習、部活、趣味等、自身を豊かにすることに結びついてくるのではないかと見えてきた感じがします。

新学習指導要領にもありますが、やらされる道徳ではなく、自主的に湧いてくる何かを育てていきたいものだなと思います。

(市長)

一通り委員長以下、みなさんからご意見を賜りましたが、ほかに何か言っておかなければならないことはありませんか。

(委員長)

道徳の定義はないのかもしれませんが、ただ、人間が生きるその価値観、アイデンティティ、その中には生と死の生の部分ですが、あなたの生きようとする力というのが、教科書採択の中でありました。

一説です。

「あらゆる能力と生きる力を発揮して生まれてきたことが、自ら生きることを選び取った瞬間だったんです。生まれてくることができた。それはあたりまえじゃない。すごいこと。お母さんもがんばった。でも、もっとがんばったのはあなただったんだ。だから自信と誇りをもっていいのですよ」。

おぎゃあと生まれてきたのが誕生日でみんなが祝ってくれるのですが、もしかしたら、生んでくれてありがとうとお母さんにお礼を言う日なのかもしれません。お互いの命のバトンタッチといいたいでしょうか。そして、「生きていることは100点満点だよ」とお互いに認め合える瞬間だと思います。

それが生であるならば、死というのをどう捉えていくのか。

外旭川病院の看護病棟に出入させていただいており、そこでは延命治療ではなく、死への準備教育をしています。そのまま、今をどう生きているのかということをもみんなで考えています。その生きている力がそのまま学習になり、身になっていきます。

死と向き合ったからこそ、生きる力が身に付いていきます。これは、他人ではなく肉親の死を見取ることで、死というのは何かが消えていくことでなく、死に関わった人々に生きる力、学ぶ力を自然と湧き上がらせてくるものという気がします。さきほど、教育長がおっしゃっていた、湧き上がってくる力、思いとはそういうことなのかなと思います。

そこで、人間の生まれる瞬間、亡くなっていく時には、学校側で率先して子どもたちが立ち会う場をつくってあげるという考え方もいいのかなと思います。

(市長)

確かに、以前は、病院や施設ではなく家で亡くなっていたから、子どもたちが自分の大好きなおじいちゃんおばあちゃんが亡くなること、人が死ぬということがどういうことなのか、それから、子どもを生む時も家で産んで産婆さんにとりあげてもらったことがあったから、お母さんがど

れだけががんばって新しい生命を生み出すかということがわかっていました。今、そういう機会が無いというのはそのとおりだと思います。他にないでしょうか。

(市長)

いつも職員に、教育というのは「家庭で種を蒔いて、学校で花を咲かせ、社会で実を实らせる」ことだと言います。今回の道徳教育は「今までいろいろな問題がある中で、学校の花を咲かせる場面で少し花に手をかけなかったり、少し、肥やしが足りなかったためにきれいな花が咲かなかった。だから、もう一度、手をかけるところをみんなで見直しましょう」ということから始まったのだと思います。

では、その元となる家庭はどうでしょうか。専門教育の中で自由や平等、権利を教えて、義務や責任を教えないまま18年、20年と子どもたちが育ち、社会に出て結婚して子どもを育て20年。だから教育というのは40年、50年かけないと変わらないとよく言われます。

今、学校が一生懸命子どもたちに道徳教育をやらうとしている時に、その元となる家庭が、あと50年経たないと、つまり、道徳教育を受けた子どもたちが家庭に入って親になり初めて家庭教育が立ち直る、これでは困る話だろうと思います。本来であれば、学校で道徳教育が始まる時に、親御さんにも何か気付いていただかなければならないのではないのでしょうか。

家庭、学校、社会が三位一体となって取り組むためには、どうしたらよいのでしょうか。一つは、社会または家庭でも良いのですが、今、能代で道徳、倫理教育をしているのに、実践倫理宏正会で行っている朝起会、企業体がやっている倫理法人会があります。どこかで家庭や社会がそういうものを学べる場所がないと、学校だけでやっていると50年かかるのではないのでしょうか。子どもに教育しても、例えば、みんなで揃って食事が出来る時間があれば、子どもたちが「学校で良い話を聞いたよ」と伝えられますが、どうも最近はそれも怪しい。本当の教育ということを考えると、三位一体をどう考えていくかということもあるのではないのでしょうか。せつかく学校で教えても、家庭が「何をそんな甘いことを言っているのか」という対応となつてはうまくいきません。その辺はすごく難しい気がします。でも、これは、気づいた人がやっていくしかないのかもしれないかもしれません。「よし、うちの家でまずやってみよう」、「悪いものは悪い」としていくしかないのかもしれないかもしれません。

(教育長)

家庭教育からしっかりやらないと、学校ではきれいな花が咲かないというのは、そのとおりだと思いますが、学校としては家庭教育がしっかりしていないからという言い訳は通じません。家庭教育をしっかり受けてきた子も、受けてきていない子も同時に一斉に並べて教育をするので、個々の生徒への話し方に注意が必要であり、また、受けてきたかそうでないかを見抜ける眼力を、哲学的に大学等の教員養成の中で学ぶことも必要と思います。家庭の事情を知らないで叱る指導を繰り返し、子どもに傷を与えていく場面も学校ではあるので、見えないところに気がつく力が教師にも必要と思います。いわゆるカウンセラー的なところが、これからは教科指導よりも大切なのではないかと思います。

そこで、できるだけカウンセラーの配置をしたいと考えていますが、県内には資格をもっている人が本当に少なく、秋田市でも仙台や盛岡から出張してもらい配置している状況です。資格を取るのに難しい面もありますが、財政も大切だと感じています。学校は、学校だけで独立してはいないのですが、学校として出来ることが最低何なのか、最大何なのか見極めながら頑張りたいと思います。

(委員長)

三つ子の魂100までといます。保育園、小学校、中学校、高校その連鎖の中でそれぞれが

連携を保ち、そして同じ価値観ではないが、横の広がりや時間軸での指導という形で、教える側が連携して接することも大切ではないでしょうか。ある意味で、人格は三つ子の魂ですから3歳までに8割は決まってしまう、あとの2割は90年かけてつくっていくことになります。子どもの姿を保育園の先生から小学校、中学校の先生が受け継いでつなげていく、そういう連携もあるのかなと思います。

(市長)

おっしゃるとおりで、教育長の決意は大変うれしく、頑張ってもらいたい。そうであってほしい。

委員長の話に関してですが、豊島区との教育連携を通じ前から感じているのは、能代市は、幼児教育と小学校との連携がちょっと弱いということです。豊島区で講演したことがあったのですが、教育委員、小学校の校長のほかには幼稚園の園長先生までいて、こちらが恥ずかしくなるくらい熱心に聴いていました。幼稚園のみなさんと学校教育との連携がよくできているなと思いました。それで、教育長に、幼児教育と学校教育とのつながりをきっちりやれば良いのではないかとお願いしています。例えば、問題のある子が小学校に上がった時に、何も知らないで小学校側が受けるのと、幼稚園で問題があった時にはこういう対応をしていたという解決策がついて受けるのとではまるで違うと思います。

そのため、学校教育と家庭教育の間をつなぐというのは大変大事なことで、家庭教育が50年かかり待てないところは幼児教育でつなぐというのは委員長のおっしゃるとおりだと思います。

もう一つ我々が感じるのが公立学校であるということ。公立学校は、一番下のところをある程度レベルを上にしていかなければなりません。切り捨てられる部分があればやりやすいかもしれないが、それはなかなかできず難しいことです。

(教育長)

道徳とは直接関係ないかもしれませんが、上位層が少ないため、どうして上位層を育てないのかと言われますが、今、市長もおっしゃっていたように、義務教育は下位層を標準に上げていくことが責任であると思っています。できる子は放っておいてもできます。放っておいてはできない子に意欲を与えるのが学校の先生の役目であると思っています。ただ、いつか秋田県、能代市も上位層が多いと言われるようになれば嬉しいと思います。

(市長)

東大に受験して合格する率は東北では秋田県が一番で、宮城県ではないそうです。本当にできる子はできる、ただ、数は少ないですね。秋田県の高校生は東北大学へ行く人が多いせいもあります。

教育部、現場からは何かありますか。

(事務局)

ありません。

(市長)

特にならぬようでございますので、今回用意した案件はすべて終了しました。進行を事務局に返したいと思います。

【閉会】 (教育部長)

ありがとうございました。これを持ちまして、平成28年度能代市総合教育会議を閉会いたします。